

夏目漱石

坊つちゃん
草枕
夢十夜
倫敦塔
三四郎

現代日本小說大系 第六十卷

昭和二十四年五月二十日 初版印刷
昭和二十四年五月廿五日 初版發行

定價 百八拾圓

著 者 夏 目 漱 石

發行者 東京都千代田區神田小川町三丁目八番地
河 出 孝 雄

編輯者 東京都千代田區神田小川町三丁目八番地
日本近代文藝研究會
伊 藤 整

印刷者 東京都千代田區神田小川町二丁目十二
小 島 順 三 郎

發行所

東京都千代田區
神田小川町三ノ八 株式會社

河 出 書 房

會員番號A一〇一四番
電話神田(25)三一七四番

株式會社英秀社印刷

夏目漱石

坊つちやん
草 枕
夢 十 夜
倫 敦 塔
三 四 郎

坊っちゃん

一

親譲りの無鐵砲で小供の時から損ばかりして居る。小學校に居る時分學校の二階から飛び降りて一週間程腰を抜かした事がある。なぜそんな無闇をしたと聞く人があるかも知れぬ。別段深い理由でもない。新築の二階から首を出して居たら、同級生の一人が冗談に、いくら威張つても、そこから飛び降りる事は出来まい。弱虫やーい。と囃したからである。小使に負ぶさつて歸つて來た時、おやぢが大きな眼をして二階位から飛び降りて腰を抜かす奴があるかと云つたから、此次は抜かさずに飛んで見せますと答へた。親類のものから西洋製のナイフを貰つて奇麗な刃を日に磨いて、友達に見せて居たら、一人が光る事は光るが切れ

さうもないと云つた。切れぬ事があるか、何でも切つて見せると受け合つた。そんなら君の指を切つて見ろと注文したから、何だ指位此通りだと右の手の親指の甲をはすに切り込んだ。幸、ナイフが小さいのと、親指の骨が堅かつたので、今だに親指は手に付いて居る。然し創痕は死ぬ迄消えぬ。

庭を東へ二十歩に行き盡すと、南上がりに聊か許りの菜園があつて、眞中に栗の木が一本立つて居る。是は命より大事な栗だ。實の熟する時分は起き抜けに脊戸を出て落ちた奴を拾つてきて、學校で食ふ。菜園の西側が山城屋と云ふ質屋の庭続きで、此質屋に勘太郎といふ十三四の忰が居た。勘太郎は無論弱虫である。弱虫の癖に四つ目垣を乗りこえて、栗を盗みにくる。ある日の夕方折戸の蔭に隠れて、とうとう勘太郎を捕まへてやつた。其時勘太郎は逃げ路を失つて、一生懸命に飛びかゝつて來た。向ふは二つ許り年上である。弱虫だが力は強い。鉢の開いた頭を、こつちの胸へ宛てゝぐいゝ押しした拍子に、勘太郎の頭がすべつて、おれの袷の袖の中に這入つた。邪魔になつて手が使へぬから、無暗に手を振つたら、袖の中にある勘太郎の頭が、右左へぐらぐら靡いた。仕舞に苦しがつて袖の中か

ら、おれの二の腕へ食ひ付いた。痛かつたから勘太郎を垣根へ押しつけて置いて、足捌あしはきをかけて向むかへ倒してやつた。山城屋の地面は菜園より六尺がた低い。勘太郎は四つ目垣を半分崩して、自分の領分へ眞逆まぎさか様に落ちて、ぐうと云つた。勘太郎が落ちるときに、おれの袷の片袖がもげて、急に手が自由になつた。其晩母が山城屋に詫びに行つた序でに袷の片袖も取り返して來た。

此外いたづらは大分だいぶやつた。大工の兼公と肴屋の角をつれて、茂作の人參畠をあらした事がある。人參の芽が出揃はぬ處へ藪くさが一面に敷いてあつたから、其上で三人が半日相撲をとりつゞけに取つたら、人參がみんな踏みつぶされて仕舞つた。古川の持つて居る田圃の井戸を埋めて尻を持ち込まれた事もある。太い孟宗の節を抜いて、深く埋めた中から水が湧き出て、そこいらの稻に水がかゝる仕掛であつた。其時分はどんな仕掛か知らぬから、石や棒ちぎれをぎう／＼井戸の中へ挿し込んで、水が出なくなつたのを見届けて、うちへ歸つて飯を食つて居たら、古川が眞赤ましかになつて怒鳴り込んで來た。慥か罰金を出して濟んだ様である。

おやぢは些ちともおれを可愛がつて呉れなかつた。母は兄

許り最負にして居た。此兄はやに色が白くつて、芝居の眞似をして女形になるのが好きだつた。おれを見る度にこいつはどうせ碌なものにはならないと、おやぢが云つた。亂暴で亂暴で行く先が案じられると母が云つた。成程碌なものにはならない。御覽の通りの始末である。行く先が案じられたのも無理はない。只懲役に行かないで生きて居る許りである。

母が病氣で死ぬ二三日前墓所で宙返りをしてへつつひの角で肋骨を撲うつて大に痛かつた。母が大層怒つて、御前の様なもの顔は見たくないと云ふから、親類へ泊りに行きて居た。するととう／＼死んだと云ふ報知しらせが來た。さう早く死ぬとは思はなかつた。そんな大病なら、もう少し大人しくすればよかつたと思つて歸つて來た。さうしたら例の兄がおれを親不孝だ、おれの爲めに、おつかさんが早く死んだんだと云つた。口惜しかつたから、兄の横つ面を張つて大變叱られた。

母が死んでからは、おやぢと兄と三人で暮して居た。おやぢは何にもせぬ男で、人の顔さへ見れば貴様は駄目だ駄目だと口癖の様に云つて居た。何が駄目なんだか今に分らない。妙なおやぢが有つたもんだ。兄は實業家になるとか

云つて頻りに英語を勉強して居た。元來女の様な性分で、ずるいから、仲がよくなかつた。十日に一遍位の割合で喧嘩をして居た。ある時将棋をさしたら卓怯な待駒をして、人が困ると嬉しさうに冷やかした。あんまり腹が立つたから、手に在つた飛車を肩間へ擲さつてやつた。肩間が割れて少々血が出た。兄がおやぢに言付けた。おやぢがおれを勘當すると言ひ出した。

其時はもう仕方がないと思念して先方の云ふ通り勘當される積りで居たら、十年來召し使つて居る清と云ふ下女が、泣きながらおやぢに詫まつて、漸くおやぢの怒りが解けた。それにも關らずあまりおやぢを怖いとは思はなかつた。却つて此清と云ふ下女に氣の毒であつた。此下女はもと由緒のあるもの、たつたさうだが、瓦解のときに零落して、つい奉公逆する様になつたのだと聞いて居る。だから婆さんである。此婆さんがどう云ふ因縁か、おれを非常に可愛がつて呉れた。不思議なものである。母も死ぬ三日前に愛想をつかした——おやぢも年中持て餘してゐる——町内では亂暴者の惡太郎と爪弾きをする——此おれを無暗に珍重してくれた。おれは到底人に好かれる性でないときあらめて居たから、他人から木の端の様に取扱はれるのは

何とも思はない、却つて此清の様にちやほやしてくれろのを不審に考へた。清は時々臺所で人の居ない時に「あなたは眞つ直でよい御氣性だ」と賞める事が時々あつた。然しおれには清の云ふ意味が分からなかつた。好い氣性なら清以外のものも、もう少し善くしてくれるだらうと思つた。清がこんな事を云ふ度におれは御世辭は嫌だと答へるのが常であつた。すると婆さんは夫だから好い御氣性ですと云つては、嬉しさうにおれの顔を眺めて居る。自分の力でおれを製造して誇つて居る様に見える。少々氣味がわるかつた。

母が死んでから清は愈々おれを可愛がつた。時々はお佛心になぜあんなに可愛がるのかと不審に思つた。つまらない、廢せばいいのにと思つた。氣の毒だと思つた。夫でも清は可愛がる。折々は自分の小遣で金鐙や紅梅焼を買つてくれる。寒い夜などはひそかに蕎麥粉を仕入れて置いて、いつの間にか寢て居る枕元へ蕎麥湯を持つて来てくれる。時には鍋焼饅頭さへ買つてくれた。只食ひ物許りではない。靴足袋ももらつた、鉛筆も貰つた。帳面も貰つた。是はずつと後の事であるが金を三圓許り貸してくれた事さへある。何も貸せと云つた譯ではない。向て部屋へ持つて來

て御小遣がなくて御内りでせう、御使ひなさいと云つて呉れたんだ。おれは無論入らないと云つたが、是非使へと云ふから、借りて置いた。實は大變嬉しかつた。其三圓を蠅臺口へ入れて、懷へ入れたなり便所へ行つたら、すぼりと後架の中へ落して仕舞つた。仕方がないから、のそく出て来て實は是々だと清に話した所が、清は早速竹の棒を捜して来て、取つて上げますと云つた。しばらくすると井戸端でざあ／＼音がするから、出て見たら竹の先へ蠅臺口の紐を引き懸けたのを水で洗つて居た。夫から口をあけて壹圓札を改めたら茶色になつて模様が消えかゝつて居た。清は火鉢で乾かして、是でいゝでせうと出した。一寸かい見て臭いやと云つたら、それぢや御出しなさい、取り換へて来て上げますからと、どこでどう胡魔化したか札の代りに銀貨を三圓持つて來た。此三圓は何に使つたか忘れて仕舞つた。今に返すよと云つたぎり、返さない。今となつては十倍にして返してやりたくても返せない。

清が物を呉れる時には必ずおやぢも兄も居ない時に限る。おれは何が嫌だと云つて人に隠れて自分丈得をする程嫌な事はない。兄とは無論仲がよくないけれども、兄に隠して清から菓子や色鉛筆を買ひたくはない。なぜ、おれ一

人に呉れて、兄さんには遣らないのかと清に聞く事がある。すると清は澄しただもので御兄様は御父様が買つて御上げなさるから構ひませんと云ふ。是は不公平である。おやぢは頑固だけれども、そんな依怙蟲負はせぬ男だ。然し清の眼から見るとさう見えるのだらう。全く愛に溺れて居たに違ない。元は身分のあるものでも教育のない婆さんだから仕方がない。單に是許ではない。最負目は恐ろしいものだ。清はおれを以て將來立身出世して立派なものになると思ひ込んで居た。其癖勉強をする兄は色許り白くつて、迪も役には立たないと一人できめて仕舞つた。こんな婆さんに逢つては叶はない。自分の好きなものは必ずえらい人物になつて、嫌なひとは屹度落ち振れるものと信じて居る。おれは其時から別段何になると云ふ了見もなかつた。然し清がなる／＼と云ふものだから、矢つ張り何かに成れるんだらうと思つて居た。今から考へると馬鹿々々しい。ある時杯は清にどんなものになるだらうと聞いて見た事がある。所が清にも別段の考もなかつた様だ。只手車へ乗つて、立派な玄關のある家をこしらへるに相違ないと云つた。

夫から清はおれがうちでも持つて獨立したら、一所にな

る氣で居た。どうか置いて下さいと何遍も繰り返して頼んだ。おれも何だかうちが持てる様な氣がして、うん置いてやると返事丈はして置いた。所が此女は中々想像の強い女で、あなたはどこが御好き、麴町ですか麻布ですか、御庭へぶらんこを御こしらへ遊ばせ、西洋間は一つで澤山です杯と勝手な計畫を獨りで竝べて居た。其時は家なんか欲しくも何ともなかつた、西洋館も日本建も全く不用であつたから、そんなものは欲しくないと、いつでも清に答へた。すると、あなたは慾がすくなくつて、心が奇麗だと云つて又賞めた。清は何と云つても賞めてくれる。

母が死んでから五六年の間は此狀態で暮して居た。おやぢには叱られる。兄とは喧嘩をする。清には菓子を買ふ、時々賞められる。別に望もない、是で澤山だと思つて居た。ほかの小供も一概にこんなものだらうと思つて居た。只清が何かにつけて、あなたは御可哀想だ、不仕合だと無暗に云ふものだから、それぢや可哀想で不仕合せなんだらうと思つた。其外に苦になる事は少しもなかつた。只おやぢが小遣を呉れないには閉口した。

母が死んでから六年目の正月におやぢも卒中で亡くなつた。其年の四月におれはある私立の中學校を卒業する。六

月に兄は商業學校を卒業した。兄は何とか會社の九州の支店に口があつて行かなければならん。おれは東京でまだ學問をしなければならぬ。兄は家を賣つて財産を片付けて任地へ出立すると云ひ出した。おれはどうでもするが宜からうと返事をした。どうせ兄の厄介になる氣はない。世話をしてくれるにした所で、喧嘩をするから、向でも何とか云ひ出すに極つて居る。なまじい保護を受ければこそ、こんな兄に頭を下げなければならぬ。牛乳配達をしても食つてられると覺悟をした。兄は夫から道具屋を呼んで来て、先祖代々の瓦落多を二東三文に賣つた。家屋敷はある人の周旋である金満家に譲つた。此方は大分金になつた様だが、詳しい事は一向知らぬ。おれは一ヶ月以前から、しばらく前途の方向のつく迄神田の小川町へ下宿して居た。清は十年居たりちが人手に渡るのを大に残念がつたが、自分のものでないから、仕様がなかつた。あなたがもう少し年をとつて入らつしやれば、こゝが御相續が出来ますものをとしきりに口説いて居た。もう少し年を取つて相續が出来ぬものなら、今でも相續が出来ぬ筈だ。婆さんは何も知らないから年さへ取れば兄の家がもらへると信じて居る。

坊

つ

ち

や

ん

兄とおれは斯様に分れたが、困つたのは清の行く先である。兄は無論連れて行ける身分でなし、清も兄の尻にくっ付いて九州下り迄出掛ける氣は毛頭なし、と云つて、此時のおれは四疊半の安下宿に籠つて、夫すらもいざとなれば直ちに引拂はねばならぬ始末だ。どうする事も出来ん。清に聞いて見た。どこかへ奉公でもする氣かねと云つたらあなたが御うちを持つて、奥さまを御貰ひになる迄は、仕方がないから、甥の厄介になりませうと漸く決心した返事をした。此甥は裁判所の書記で先づ今日には差支なく暮して居たから、今迄も清に來るなら來いと二三度勧めたのだが、清は假令下女奉公はしても年來住み馴れた家の方がいいと云つて應じなかつた。然し今の場合知らぬ屋敷へ奉公易をして入らぬ氣兼ね仕直すより、甥の厄介になる方がましだと思つたのだらう。夫にしても早くうちを持つての、妻を貰への、來て世話をするのと云ふ。親身の甥よりも他人のおれの方が好きなのだらう。

困りはせんと思つたが、例に似ぬ淡泊な處置が氣に入つたから、禮を云つて貰つて置いた。兄は夫から五十圓出して之を序に清に渡してくれと云つたから、異議なく引き受けた。二日立つて新橋の停車場で分れたぎり兄には其後一遍も逢はない。

おれは六百圓の使用法に就て寝ながら考へた。商賣をしたつて面倒くさくつて旨く出来るものぢやなし、ことに六百圓の金で商賣らしい商賣がやれる譯でもなからう。よしやれるとしても、今の様ぢや人の前へ出て教育を受けたと威張れないから詰り損になる許りだ。資本杯はどうでもいいから、これを學資にして勉強してやらう。六百圓を三に割つて一年に二百圓宛使へば三年間は勉強が出来る。三年間一生懸命にやれば何か出来る。夫からどこの學校へ這入らうと考へたが、學問は生來とれもこれも好きでない。ことに語學とか文學とか云ふものは眞平御免だ。新體詩などと來ては二十行あるうちで一行も分らない。どうせ嫌なものなら何をやつても同じ事だと思つたが、幸ひ物理學校の前を通り掛つたら生徒募集の廣告が出て居たから、何も縁だと思つて規則書をもらつてすぐ入學の手續をして仕舞つた。今考へると是も親譲りの無鐵砲から起つた失策だ。

三年間まあ人並に勉強はしたが別段たちのいゝ方でもないから、席順 いつでも下から勘定する方が便利であつた。然し不思議なもので、三年立つたらとう／＼卒業して仕舞つた。自分でも可笑しいと思つたが苦情を云ふ譯もないから大人しく卒業して置いた。

卒業してから八日目に校長が呼びに來たから、何か用だらうと思つて、出掛けて行つたら、四國邊のある中學校で數學の教師が入る。月給は四十圓だが、行つてはどうだと云ふ相談である。おれは三年間學問はしたが實を云ふと教師になる氣も、田舎へ行く考へも何もなかつた。尤も教師以外に何をしようと云ふあてもなかつたから、此相談を受けた時、行きませうと即席に返事をした。是も親譲りの無錢砲が祟つたのである。

引き受けた以上は赴任せねばならぬ。此三年間は四疊半に蟄居して小言は只の一度も聞いた事がない。喧嘩もせずには濟んだ。おれの生涯のうちでは比較的呑氣な時節であつた。然しかうなると四疊半も引き拂はなければならん。生れてから東京以外に踏み出したのは、同級生と一所に鎌倉へ遠足した時許りである。今度は鎌倉所では、いゝ。大膽な遠くへ行かねばならぬ。地圖で見ると浜濱で針の先程小さ

く見える。どうせ碌な所ではあるまい。どんな町で、どんな人が住んでるか分らん。分らんでも困らない。心配にはならぬ。只行く許りである。尤も少々面倒臭い。

家を疊んでもからも清の所へは折々行つた。清の甥と云ふのは存外結構な人である。おれが行くたびに、居りさへすれば、何くれと款待なして呉れた。清はおれを前へ置いて、色々おれの自慢を甥に聞かせた。今に學校を卒業すると麹町邊へ屋敷を買つて役所へ通ふのだと吹聴した事もある。獨りで極めて一人で嘔舌るから、こつちは困まつて顔を赤くした。夫も一度や二度ではない。折々おれが小さい時寐小便をした事迄持ち出すには閉口した。甥は何と思つて清の自慢を聞いて居たか分らぬ。只清は昔風の女だから、自分とおれの關係を封建時代の主従の様に考へて居た。自分の主人なら甥の爲めにも主人に相違ないと合點したものでらしい。甥こそいゝ面の皮だ。

愈々約束が極まつて、もう立つと云ふ三日前に清を尋ねたら、北向の三疊に風邪を引いて寢て居た。おれの來たのを見て起き直るが早いか、坊つちやん何時家を御持ちなさいますと聞いた。卒業さへすれば金が自然とポケットの中に湧いて來ると思つて居る。そんなにえらい人をつらま

へて、まだ坊つちやんと呼ぶのは、愈々馬鹿氣で居る。おれは簡単に當分うち持たない。田舎へ行くんだと云つたら、非常に失望した客子で、胡麻鹽の鬢の亂れを頻りに撫でた。餘り氣の毒だから「行く事は行くがぢき歸る。來年の夏休には屹度歸る」と慰めてやつた。夫でも妙な顔をして居るから「何を見やげに買つて來てやらう、何が欲しい」と聞いて見たら「越後の笹飴が食べたい」と云つた。越後の笹飴なんて聞いた事もない。第一方角が違ふ。「おれの行く田舎には笹飴はなさうだ」と云つて聞かしたら「そんなら、どつちの見當です」と聞き返した。「西の方だよ」と云ふと「箱根のさきですか手前ですか」と問ふ。随分持てあました。

出立の日には朝から來て、色々世話をやいた。來る途中小間物屋で買つて來た齒磨と楊子と手拭をズツクの革靴に入れて呉れた。そんな物は入らないと云つても中々承知しない。車を並べて停車場へ着いて、ブラットフォームの上へ出た時、車へ乗り込んだおれの顔を睨と見て「もう御別れになるかも知れません。随分御機嫌よう」と小さな聲で云つた。目に涙が一杯たまつて居る。おれは泣かなかつた。然しもう少しで泣く所であつた。汽車が餘つ程動き出

してから、もう大丈夫だらうと思つて、窓から首を出して、振り向いたら、矢つ張り立つて居た。何だか大變小さく見えた。

二

ぶうと云つて汽船がとまると、解が岸を離れて、漕ぎ寄せて來た。船頭は眞裸に赤ふんどしをしめてゐる。野蠻な所だ。尤も此熱さでは着物はきられまい。日が強いので水がやに光る。見詰めて居ても眼がくらむ。事務員に聞いて見るとおれは此所へ降りるのださうだ。見る所では大森位な漁村だ。人を馬鹿にしてゐらあ、こんな所に我慢が出来るものかと思つたが仕方がない。威勢よく一番に飛び込んだ。續づいて五六人は乗つたらう。外に大きな箱を四つ許積み込んで赤ふんは岸へ漕ぎ戻して來た。陸へ着いた時も、いの一に一番に飛び上がつて、いきなり、磯に立つて居た鼻たれ小僧をつらまへて中學校はどこだと聞いた。小僧は茫やりして、知らんがの、と云つた。氣の利かぬ田舎ものだ。猫の額程な町内の癖に、中學校のありかも知れぬ奴があるものか。所へ妙な箇つぽうを着た男がきて、こつちへ來いと云ふから、尾いて行つたら、港屋とか云ふ宿屋へ連

れて来た。やな女が聲を揃へて御上がりなさいと云ふので、上がるのがいやになつた。門口へ立つたなり中學校を教へると云つたら、中學校は是から汽車で二里許り行かなくつちやいけないと聞いて、猶上がるのがいやになつた。おれは、筒つぼうを着た男から、おれの革靴を二つ引きたくつて、のそ／＼あるき出した。宿屋のものは變な顔をして居た。

停車場はすぐ知れた。切符も譯なく買つた。乗り込んで見るとマツチ箱の様な汽車だ。ごろ／＼と五分許り動いたと思つたら、もう降りなければならぬ。道理で切符が安いと思つた。たつた三錢である。夫から車を傭つて、中學校へ來たら、もう放課後で誰も居ない。宿直は一寸用達に出たと小使が教へた。随分氣樂な宿直があるものだ。校長でも尋ね様かと思つたが、草臥れたから、車に乗つて宿屋へ連れて行けと車夫に云ひ付けた。車夫は威勢よく山城屋と云ふうちへ横付にした。山城屋とは質屋の勘太郎の屋號と同じだから一寸面白く思つた。

何だか二階の階子段の下の暗い部屋へ案内した。熱くつて居られやしない。こんな部屋はいやだと云つたら生憎みんな寒がつて居りますからと云ひながら革靴を抛り出した

儘出て行つた。仕方がないから部屋の中へ這入つて汗をかい、我慢して居た。やがて湯に入れと云ふから、ざぶりと飛び込んで、すぐ上がつた。歸りがけに覗いて見ると涼しさうな部屋が澤山空いてゐる。失敬な奴だ。嘘をつきやあがつた。それから下女が膳を持つて來た。部屋は熱かつたが、飯は下宿のよりも大分旨かつた。給仕をしながら下女がどちらから御出になりましたと聞くから、東京から來たと答へた。すると東京はよい所で御座いませうと云つたから當り前だと答へてやつた。膳を下げた下女が寮所へ行つた時分、大きな笑ひ聲が聞えた。くだらないから、すぐ寝たが、中々寐られない。熱い許りではない。騒々しい。下宿の五倍位八釜しい。うと／＼したら清の夢を見た。清が越後の笹飴を笹ぐるみ、むしや／＼食つて居る。笹は毒だから、よしたらよからうと云ふと、いえ此笹が御藥で御座いますと云つて旨さうに食つて居る。おれがあきれ返つて大きな口を開いてハ、ハ、と笑つたら眼が覺めた。下女が雨戸を明けてゐる。相變らず空の底が突き抜けた様な天氣だ。

道中をしたら茶代をやるものだと聞いて居た。茶代をやらなないと粗末に取り扱はれると聞いて居た。こんな、狭く

て暗い部屋へ押し込めるのも茶代をやらない所爲だらう。見すばらしい服装をして、ズツクの革靴と毛織子の蝙蝠傘を提げてるからだらう。田舎者の癖に人を見括つたな。一番茶代をやつて驚かしてやらう。おれは是でも學資の餘りを三十圓程懐に入れて東京を出て來たのだ。汽車と汽船の切符代と雜費を差し引いて、まだ十四圓程ある。みんなやつたつて是からは月給を貰ふんだから構はない。田舎者はしみたれたから五圓もやれば驚ろいて眼を廻すに極つて居る。どうするか見ろと澄して顔を洗つて、部屋へ歸つて待つてると、夕べの下女が膳を持つて來た。盆を持つて給仕をしながら、やにや／＼笑つてゐる。失敬な奴だ。顔のなかを御祭りでも通りやしまし。是でも此下女の面より餘つ程上等だ。飯を済ましてからにしようと思つて居たが、癪に障つたから、中途で五圓札を一枚出して、あとで是を帳場へ持つて行けと云つたら、下女は變な顔をして居た。夫から飯を済ましてすぐ學校へ出懸た。靴は磨いてなかつた。

學校は昨日車で乗りつけたから、大概の見當は分つて居る。四つ角を二三度曲がつたらすぐ門の前へ出た。門から玄關迄は御影石で敷きつめてある。きのふ此敷石の上を車

でがら／＼と通つた時は、無暗に仰山な音がするので少し弱つた。途中から小倉の制服を着た生徒に澤山逢つたが、みんな此門を這入つて行く。中にはおれより脊が高くつて強さうなのが居る。あんな奴を教へるのかと思つたら何だか氣味が惡くなつた。名刺を出したら校長室へ通した。校長は薄髯のある、色の黒い、眼の大きな狸の様な男である。やに勿體ぶつて居た。まあ精出して勉強してくれと云つて、恭しく大きな印の捺つた、辭令を渡した。此辭令は東京へ歸るとき丸めて海の中へ抛り込んで仕舞つた。校長は今に職員に紹介してやるから、一々其人に此辭令を見せるんだと言つて聞かした。餘計な手數だ。そんな面倒な事をするより此辭令を三日間教員室へ張り付ける方がましだ。

教員が控所へ揃ふには一時間目の喇叭が鳴らなくてはならぬ。大分時間がある。校長は時計を出して見て、追々ゆるりと話す積だが、先づ大體の事を呑み込んで置いて貰はうと云つて、夫から教育の精神について長い御談義を聞かした。おれは無論いゝ加減に聞いて居たが、途中からは飛んだ所へ來たと思つた。校長の云ふ様にはとても出來ない。おれ見た様な無鐵砲なものをつらまへて、生徒の模範

になれの、一校の師表と仰がれなくては行かんの、學問以外に個人の徳化を及ぼさなくては教育者になれないの、と無暗に法外な注文をする。そんなえらい人が月給四十圓で適々こんな田舎へくるもんか。人間は大概似たもんだ。腹が立てば喧嘩の一つ位は誰でもするだらうと思つてたが、此様子ぢや減多に口も聞けない、散歩も出来ない。そんな六づかしい役なら雇ふ前にこれ／＼だと話すがいい。おれは嘘をつくのが嫌だから、仕方がない、だまされて來たのだとあきらめて、思ひ切りよく、こゝで斷はつて歸つちまはうと思つた。宿屋へ五圓やつたから、財布の中には九圓なにがししかない。九圓ぢや東京迄は歸れない。茶代なんかやらなければよかつた。惜しい事をした。然し九圓だつて、どうかならない事はない。旅費は足りなくつても嘘をつくよりましだと思つて、到底あなたの仰やる通りにや、出來ません、此辭令は返しますと云つたら、校長は狸の様な眼をぱちつかせておれの顔を見て居た。やがて、今のは只希望である、あなたが希望通り出來ないのはよく知つて居るから心配しなくつてもいいと云ひながら笑つた。その位よく知つてゐるなら、始めから威嚇さなければいいのに。さう、かうする内に、喇叭が鳴つた。教場の方が急にがや

がやる。もう教員も控所へ揃ひましたらうと云ふから、校長に尾いて教員控所へ這入つた。廣い細長い部屋の周圍に机を並べてみんな腰をかけて居る。おれが這入つたのを見て、みんな申し合せた様におれの顔を見た、見世物ぢやあるまいし。夫から申し付けられた通り一人々々の前へ行つて辭令を出して挨拶をした。大概是椅子を離れて腰をかめる許りであつたが、念の入つたのは差し出した辭令を受取つて一應拜見をして夫を恭しく返却した。丸で宮芝居の眞似だ。十五人目に體操の教師へと廻つて來た時には、同じ事を何返もやるので少々ぢれつたくなつた。向は一度で済む、こつちは同じ所作を十五返繰り返して居る。少しはひとの了見も察して見るがいい。

挨拶をしたうちに教頭のなにがしと云ふのが居た。是は文學士ださうだ。文學士と云へば大學の卒業生だからえらい人なんだらう。妙に女の様な優しい聲を出す人だつた。尤も驚いたのは此暑いのにフランクフルの襦衣を着て居る。いくら薄い地には相違なくつても暑いに極つてゐる。文學士丈に御苦勞千萬な服裝をしたもんだ。しかも夫が赤シヤツだから人を馬鹿にしてゐる。あとから聞いたら此男は年が年中赤シヤツを着るんださうだ。妙な病氣があつた者

だ。當人の説明では赤は身體に藥になるから、衛生の爲めにわざ／＼誂らへるんださうだが、入らざる心配だ。そんなら序に着物も袴も赤にすればいい。夫から英語の教師に古賀とか云ふ大變顔色の悪い男が居た。大概顔の蒼い人は瘦せてるもんだが此男は蒼くふくれて居る。昔し小學校へ行く時分、淺井の民さんと云ふ子が同級生にあつたが、此淺井のおやぢが矢張り、こんな色つやだつた。淺井は百姓だから、百姓になるとあんな顔になるかと清に聞いて見たら、さうぢやありません、あの人はうらなりの唐茄子許り食べるから、蒼くふくれるんですと教へて呉れた。それ以來蒼くふくれた人を見れば必ずうらなりの唐茄子を食つた酬だと思ふ。此の英語の教師もうらなり許り食つてゐるに違ない。尤もうらなりとは何の事か今以て知らない。清に聞いて見た事はあつたが、清は笑つて答へなかつた。大方清も知らないんだらう。夫からおれと同じ數學の教師に堀田と云ふのが居た。是は逞しい稜栗坊主で、叡山の惡僧と云ふべき面構である。人が町嚙に辭令を見せたら、見向きもせず、やあ君が新任の人か、些と遊びに來給へアハ、と云つた。何がアハ、だ。そんな禮儀を心得ぬ奴の所へ誰が遊びに行くものか。おれは此時から此坊主に山嵐と云ふ

渾名をつけてやつた。漢學の先生は流石に堅いものだ。昨日御着で、嘸御疲れで、夫でもう授業を御始めで、大分御勵精で、——とのべつに辯じたのは愛嬌のある御爺さんだ。晝學の教師は全く藝人風だ。べら／＼した透綾の羽織を着て、扇子をばちつかせて、御國はどちらでげす、え？東京？夫りや嬉しい、御仲間が出來て……私もこれで江戸つ子ですと云つた。こんなのが江戸つ子なら江戸には生れたくないもんだと心中に考へた。其ほか一人々々に就てこんな事を書けばいくらでもある。然し際限がないからやめる。

挨拶が一と通り済んだら、校長が今日はどう引き取つてまい、尤も授業上の事は數學の主任と打ち合せをして置いて、明後日から課業を始めくれと云つた。數學の主任は誰かと聞いて見たら例の山嵐であつた。忌々しい、こいつの下に働くのかおや／＼と失望した。山嵐は「おい君どこに宿つてるか、山城屋か、うん、今に行つて相談する」と云ひ残して白疊を持つて教場へ出て行つた。主任の癖に向から來て相談するなんて不見識な男だ。然し呼び付けるよりは感心だ。

夫から學校の門を出て、すぐ宿へ歸らうと思つたが、歸